令和３年度あいちラーニング推進事業研究報告書

研究テーマ	主体的に学び続ける生徒の育成を目指した授業づくり
本年度の 研究目標	(1) 昨年度までの研究指定事業を受けて、本年度も継続して各教科で発問についての研究を深め、深い学びを追究する。 (2) 授業内のグループ学習や家庭学習等あらゆる場面でＩＣＴを積極的に活用し、主体的・対話的な学びを実践する。 (3) 新教育課程に向けて、各教科で評価について研究しその成果を共有し、次年度以降に生かせるようにする。 (4) 今後の他校での授業改善や新教育課程の評価の研究に役立つように、本年度の成果を広く公開する。

研　究　の　実　施　内　容

実施月日	内　　容	備　考 (対象生徒等)
令和３年６月 ３日	カリキュラム委員会にて研究計画の概要説明	
令和３年６月 ３日	県へ計画の報告	
随　時	授業研究	
令和３年７月 ９日	大阪府立鳳高等学校視察（観点別評価について）	
令和３年７月 16 日	第１回あいちラーニング推進事業名古屋地区連絡協議会開催 （主管校（本校）主催）	
令和３年 11 月 ５日	愛知県立豊田南高等学校公開授業並びに研究協議会参加	
令和３年 11 月 ８日 ～12 日	授業公開週間を活用して授業研究を実施	
令和３年 11 月 ９日	愛知県立高蔵寺高等学校公開授業並びに研究協議会参加	
令和３年 11 月 12 日	あいちラーニング推進事業研究成果合同発表会 （三の丸庁舎・オンライン配信）	
令和３年 11 月 19 日	愛知県立松蔭高等学校公開授業並びに研究協議会参加	
令和３年 12 月 16 日	カリキュラム委員会にて中間報告	
令和４年１月 18 日	公開授業並びに研究協議会開催	
令和４年１月 28 日	第２回あいちラーニング推進事業名古屋地区連絡協議会開催 （主管校（松蔭高等学校）主催）	
令和４年２月 ３日	カリキュラム委員会にて最終報告	
令和４年２月 ３日	県へまとめの報告。ＨＰにて取組内容の公開開始	

研　究　成　果　の　評　価　及　び　普　及　・　還　元　に　関　す　る　実　績

1　授業改善について

授業改善については研究を開始してから３年になり、授業改善を進めようという動きは定着した。授業をよりよくするために各個人だけではなく、教科の者同士や、時には教科の枠を超えた者と話し合いが行われる場面を目にすることが多くなった。広く意見を求め、よりよい授業をつくりあげようとする先生方の前向きさが広がりをみせている。今後もこの雰囲気を継続していけるように努めたい。また、問いに関する研究も引き続き行い、校内で意見交換しながら評価に繋がるように深めていきたい。

2　ICT の活用について

ICT の活用については、一人１台タブレットとロイロノート・スクールの活用という形で定着した。ロイロノート・スクールの活用に関しては大方のスキルはすべての先生で身に付いた。また、生徒も戸惑うことなく利用している。しかし、今後さらに一人１台タブレットの活用を推し進めていくとなると今のネットワーク環境では回線速度が遅いと感じる場面が増えることが予想され、今後のネットワーク環境整備が必要不可欠であり、さらなる ICT 教育の推進のための喫緊の課題である。

さらに、タブレットの利用に関しても今後は様々なプラットフォームで学習した生徒が入学することが想定され、高等学校としてどのような環境を整備していくことが最適か検討すべきであると同時に、何を学ばせたいか、どう活用したいかを議論の中心に据える必要がある。

また、ICT の推進の本質は、タブレットの配備ではなく、学校環境そのものの変容が重要になる。例えば、机のサイズや教科書や副教材の電子化、教室のサイズや収容人数などであり、今後考えていかなければならない課題は山積である。それに伴い家庭での ICT 整備環境の格差是正も今後ますます問題視されていくことになる。これらの問題は都道府県レベルの議論ではなく、国レベルでの議論が必要になる。

3　評価に関して

評価方法についての研究は概ね進んだが、今後取り組みながらの微調整が必要になる。特に授業内評価に関しては、実践しながらの修正を重ねていく必要があると同時に、生徒自身が高等学校の３年間で評価をいかしながら学習改善に取り組めるように長期的なスパンで育んでいく必要がある。生徒による自己評価や相互評価を活用するだけでなく、その評価をどう教員が活用するかを議論する必要がある。また、持続可能な評価を構築するためには、評価するポイントを絞り、スリム化しなければならない。こうした一見相容れない問題を解決しなければ、今後必要となる学びを獲得することは難しい。

さらに今後は、内規の改定や成績処理システムに関する変更などの実務面を実施していかなければならない。また、評価については公平・公正であることは言うまでもないが、学校の特色として捉える側面もあることも今後の議論では重要であるが、評価は評定決定が主目的ではなく、授業改善(教師側)と学習改善(生徒側)のための評価であるという姿勢を忘れてはならない。

4　まとめ

○ 評価について考えることは、授業をよりよくすることに繋がるという認識に改められるようにする。

○ ３年間やり続けることで、生徒は変化する。

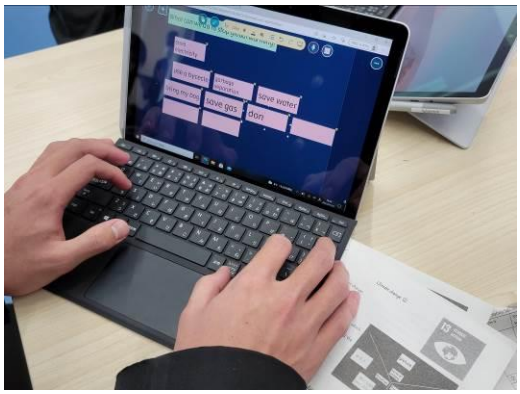
→ アクティブラーニングも意図したレベルに達するには３年かかる。評価も３年かけてよりよくできる。生徒も妥当な評価ができるようになる。やり続けてこそ意味がある。

○ ICT の活用もどんな些細なことも「よりよく」なることに繋がるなら、まず使うことを考える。使い続けることで新たな使い方が発見できる。

○ 一人で考え込まず、仲間を増やす。

→ 校内、校外問わず学びあえる“仲間”をつくろう。

5　今後の在り方について

今後は、カリキュラム委員会及び教科会、学年会で本年度の取組内容を共有し、取組についての振り返りの後、次年度以降の方向性を検討し集約する。公開授業並びに研究協議会を受け、自己評価及び学校評議員などからの外部評価を通して、主観及び客観の両面から検証する。さらに年度末に学校ＨＰにて研究成果を公開したり、重点校主催の研究協議会で情報交換や助言をしたりすることにより、広く研究成果が伝わるように努めるとともに、研究指定が終わる来年度以降も引き続き研究していくようにする。

＜参考＞　授業でのタブレット、ロイロノート・スクールの活用の様子